



親善訴えた安重根の孫 歴史問題で逆の流れに

共同通信上海支局 渡辺 和昭

「祖父が日本による統治時代に唱えた東洋平和の思想が今、現実には日本と韓国の友好に結びついていると思うと感慨無量。両国の親善が一層深まることを期待します」

1992年9月。初代韓国統監の伊藤博文を射殺した独立運動家、安重根の孫、黄恩珠さんが初来日し、旅順の監獄内で安と親交を深めた看守、千葉十七の宮城県栗原郡(現栗原市)にある菩提寺で営まれた日韓合同追悼法要に参加した。当時、仙台勤務だった私も取材を許された。

陸軍憲兵だった千葉は、クリスチャンとして国の将来を憂える安の誠実さに打たれて形見を残すよう依頼。書家でもあった安は死刑直前「为国献身軍人本分」(国のため身を献ずるのは軍人の本分)と書いた遺墨を千葉に渡した。千葉は遺墨を菩提寺に供え、安の霊を弔い続けた。

2人の心の交流を語り継ごうと菩提寺には81年、遺墨を刻んだ顕彰碑が建てられ、以来毎年、日韓合同法要が営まれてきた。

当時、60代半ばだった黄さんが顕彰碑に白菊を献花した後、目を赤くしながら日韓親善の大切さを訴えていたことを思い出す。

あれから約21年。黄さんの願いとは裏腹に日本と韓国、そして中国との政治的関係は安倍晋三首相の靖国神社参拝などで冷え込んでいく。

伊藤博文の射殺現場である中国黒竜江省のハルビン駅には今年1月、安をたたえる記念館が開館した。韓国の朴槿恵大統領が昨年6月に訪中した際、安の石碑建立を提案。中国側はより大掛かりな記念館設立で応じた。

日本の侵略を受けた中韓両国にとって、伊藤を祖国の敵とみなし日韓併合前年の1909年に射殺した安は「抗日の義士」であり「英雄」。記念館開設は、安倍政権の「右傾化」を強く警戒する中韓が歴史問題で共闘し、日本側に圧力をかける動きとみられている。

日本政府当局者は安について「死刑判決を受けたテロリスト」とした上で「一方的評価に基づき、韓国、中国が連携して国際展開する動きは(東アジア地域の)平和と安定の構築に資さない」と記念館を批判。

これに対し、韓国の与党幹部は「(安が)テロリストなら、周辺国への無慈悲な侵略と略奪を行った日本はテロ国家だ」と反論。中国外務省幹部も「記念館がテロリスト礼

賛なら、日本の指導者が(靖国神社に合祀されている)A級戦犯を参拝する行為は何に当たるのか」と批判するなど日本と中韓の間で非難の応酬が繰り返された。

記念館を見学したハルビン市の70代の男性は「日本は朝鮮を植民地支配し、中国でも多くの人が抗日戦争で死んだ。日本は中国や韓国が味わった苦しみを知り、反省すべきだ」と強調した。

一方、上海市在住の30代の日本人女性は「侵略戦争について学校であまり習わなかった」と話し、安倍首相が靖国神社を参拝するのは自由であり、中韓当局が抗議するのはおかしいとの考えを示した。

しかし、被害国である中韓側の立場を理解しようとしなければ歴史認識のギャップを埋めることができないのも事実。相互信頼が欠如したまま、不毛な感情的対立が続きかねない。

日韓関係悪化の影響を受けず、昨年も33回目となる安と千葉の追悼法要が営まれ、安の遺族も参加した。立場の違いを乗り越え、絆を深めた2人を敬い、親善の願いを込めながら祈りを捧げ続けている日韓の人々がいることも知っておく必要があると思う。